

戦略的創造研究推進事業
(社会技術研究開発)
平成28年度研究開発実施報告書

「安全な暮らしをつくる新しい公／私空間の構築」

研究開発領域

「都市における援助希求の多様性に対応する公私連携ケア

モデルの研究開発」

研究代表者氏名 島 菌 進
(上智大学グリーンケア研究所、所長)

目次

1. 研究開発プロジェクト名	2
2. 研究開発実施の要約	2
2 - 1. 研究開発目標	2
2 - 2. 実施項目・内容	2
2 - 3. 主な結果	3
3. 研究開発実施の具体的内容	4
3 - 1. 研究開発目標	4
3 - 2. 実施方法・実施内容	6
3 - 3. 研究開発結果・成果	8
3 - 4. 会議等の活動	11
4. 研究開発成果の活用・展開に向けた状況	14
5. 研究開発実施体制	15
6. 研究開発実施者	17
7. 研究開発成果の発表・発信状況、アウトリーチ活動など	21
7 - 1. ワークショップ等	21
7 - 2. 社会に向けた情報発信状況、アウトリーチ活動など	21
7 - 3. 論文発表	21
7 - 4. 口頭発表（国際学会発表及び主要な国内学会発表）	22
7 - 5. 新聞報道・投稿、受賞等	22
7 - 6. 知財出願	22

1. 研究開発プロジェクト名

都市における援助希求の多様性に対応する公私連携ケアモデルの研究開発

2. 研究開発実施の要約

2 - 1. 研究開発目標

市民の安全な暮らしをつくるには、生活課題が複雑化する前に、公私の間をまたぐ総合的な対応を行う必要があるが、そのような対応を試みている都市は少ない。本プロジェクトでは、平成27年度から全市民を対象とする地域包括ケアシステムの構築に取り組んでいる川崎市をフィールドに、公的支援の実態把握を行うとともに、中間集団の実態把握、潜在的機能の抽出を通じ、支援・ケアにおける資源の見える化とその適正化を働きかける。

行政や医療機関などの公的機関と、中間団体や地域のケア人材が連携し、地域住民のきわめて多様な援助希求をすばやく察知し、未然に孤立化や暴力に至るのを防ぐ方策を整えていくことが大きな課題である。そのために、全市民を対象とした川崎市の地域包括ケアに関わりながら、公私連携の新たなあり方を見出していく。

2 - 2. 実施項目・内容

公領域では、空間疫学Gが空間疫学のデータを構成しICT（Information and Communications Technology）を用いた実装を行っていき、みまもりロジックGが地域ケアの作業モデルを作成しその評価のシステムを構築していき、それらを見定めつつ、メンタルヘルスGが援助希求の諸様態をケア実践の現場に即して把握し横串の支援・介入のモデルを構築していく。

私領域では、地域潜在力Gが高齢者ケアや宗教団体の実際に即した民間支援の可能性を具体例に則し把握するとともに「集い」型の場の構築について社会実験を含めて探り、ケア人材開発Gが民間のケア提供者を中心に関与者の人生観・死生観を調査しつつより充実した支援・ケアのための人材養成を実地に試みながら探求し、ソーシャルキャピタルGがソーシャルキャピタル（社会関係資本）という視点から中間集団の全体像を把握しつつ、ケア人材開発Gの試みがより広い実装に向かうための条件を明らかにしていく。そして、平成28年度から30年度にかけての公私双方の探求を、30年度の半ば以降総合して、「双方向的な公私連携の川崎モデル」の構築へと総合していく。

こうした公私連携による「みまもりデータベース」の作成と、ICTによる情報共有と利用のためのツールを開発し、提供する。

公私双方の機能強化の方策を「双方向的な公私連携の川崎モデル」として示して社会実装をめざす。川崎市は、複合的都市型コミュニティとして多様性を有しており、本プロジェクトによって得られた知見を他地域への汎用性を持った形で提供する。

各グループの実施項目

【メンタルヘルスG】

実施項目：援助希求の諸様態の類型化及び、行政機関が行う支援の現状把握

【空間疫学G】

実施項目：空間疫学による川崎市行政データの可視化と解析

【みまもりロジックG】

実施項目：援助希求の諸様態の類型化と介入方法の検討

【ソーシャルキャピタルG】

実施項目：中間集団およびソーシャルキャピタルの測定

【地域潜在力G】

実施項目：潜在的な社会資源の発掘と機能の検証、集いモデルの社会実装

【ケア人材育成G】

実施項目：ケア志願者の意識面（死生観等）の解明と研究開発

2 - 3. 主な結果

【マネジメントG】

公領域の3グループの領域会議・打ち合わせが毎月行われ、私領域の3グループの領域会議・打ち合わせが隔月行われており、これにはマネジメントグループのメンバーが参加し、情報共有と研究開発の円滑な遂行のための調整を行った。

【メンタルヘルスG】

毎月開催される、川崎市精神保健福祉センターと障害者センターの職員が合同で行っている、精神科救急事例の検討会に同席しながら、安全な暮らしを守る地域支援の仕組みを可視化していくという本研究班の向かうべき方向性と取り組むべき課題が明らかになった。

【空間疫学G】

・川崎市の職員を対象とした勉強会を開催し、統計、空間疫学の行政での活用方法を伝達し、川崎市と協議を重ねて行政データを本研究で活用するための枠組みを整理することなどにより、自殺者や外国人居住者の分布を空間疫学的な手法により可視化した。

【みまもりロジックG】

川崎市地域リハビリテーションセンターおよび保健福祉センターにおける諸調査を通じた、当該センター活動プロセスの構造的な可視化を行い、浅層・中層・深層モデルの理解を経て、地域の障害福祉を業務とするエキスパートたちが、諸判断時に活用している事実・データについてヒアリングを繰り返し行った。

【ソーシャルキャピタルG】

公私の「間」に存在する中間集団として、宗教施設やNPO、ボランティアだけでなく、自治会・町内会・民生委員・児童委員・社会福祉協議会・地域教育会議など既存の中間集団を対象に、インタビュー調査を行なった。

【地域潜在力G】

他地域のグッドプラクティスの収集に着手し、様々な地域の団体訪問調査を行った。

【ケア人材育成G】

調査対象となる候補機関・団体の選定の上で、研究実施者が個別に各団体を訪問し、フィールド・ワークを行い、信頼関係を築くとともに、本調査への協力の可能性を検討した。

3. 研究開発実施の具体的内容

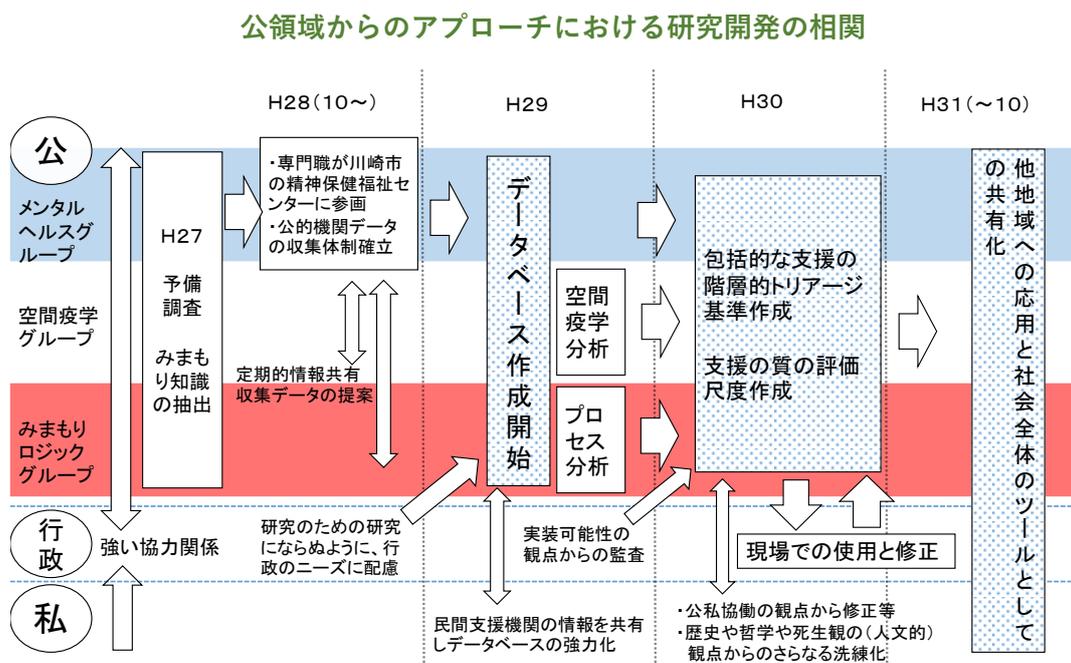
3 - 1. 研究開発目標

本プロジェクトでは、平成27年度から全市民を対象とする地域包括ケアシステムの構築に取り組んでいる川崎市をフィールドに、市民の安全な暮らしのために、公私の間をまたぐ総合的な対応を行う具体的な仕組みを開発する。公的支援の実態把握を行うとともに、中間集団の実態把握、潜在的機能の抽出を通じ、支援・ケアにおける資源の見える化とその適正化を働きかける。

行政や医療機関などの公的機関と、中間団体や地域のケア人材が連携し、地域住民のきわめて多様な援助希求をすばやく察知し、未然に孤立化や暴力に至るのを防ぐ方策を整えていくことが大きな課題である。そのために、全市民を対象とした川崎市の地域包括ケアに関わりながら、公私連携の新たなあり方を見出していく。

公領域では、企画調査の段階で明らかになった公的支援における困難事例の把握とその対応のプロセスの解明と適正化を中心に据える。私領域では、地域や中間団体、個人、ボランティア、NPO等の実態の把握と、それらの潜在力と公的支援との連動の仕組みを様々な調査から明確にすることが中心となる。

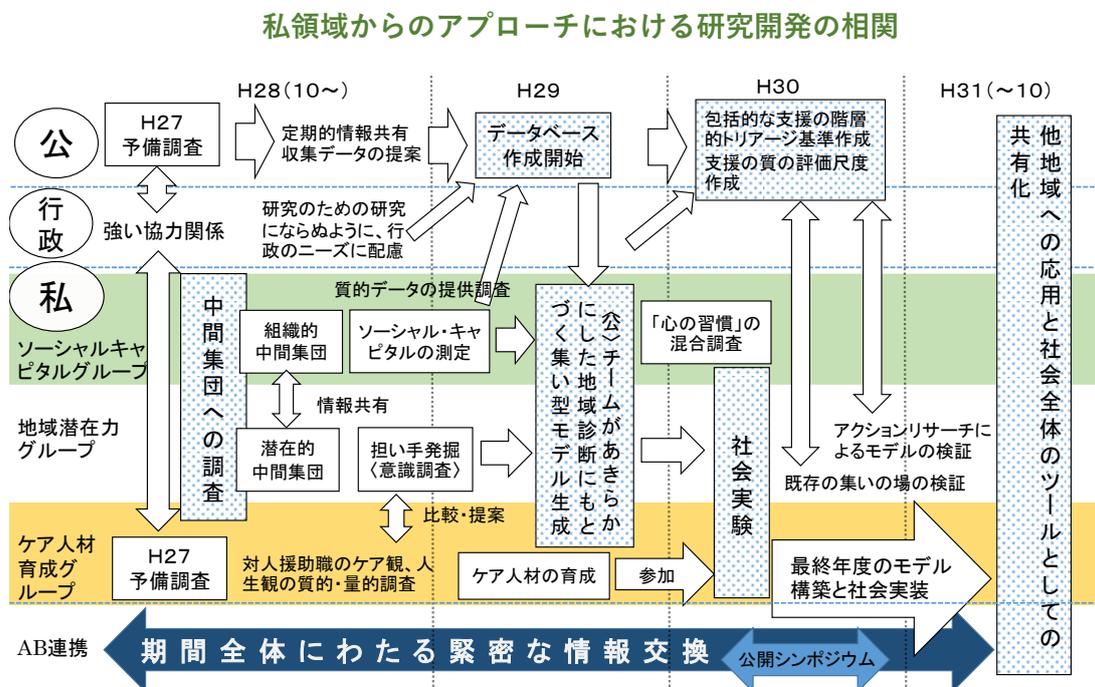
【表1】公領域からのアプローチにおける研究開発の相関



公領域からのアプローチを行う研究では、メンタルヘルスグループの岡村、熊倉、空間疫学グループの立森、みまもりロジックグループの水流が連携し、情報の共有を行う会合を定期的開催した。平成28年度には、メンタルヘルスグループから、専門職を川崎市精神保健福祉センターへ参画させ、公的機関データの収集体制を確立する作業を開始した。これらの情報は公的領域を研究する3グループの定期的な会合により空間疫学グループ、みまもりロジックグループへ共有され、領域全体で検討することにより共同開発作業を開始した。また、いかなるデータが必要であるのかを、空間疫学グループとみまもりロジックグループからフィードバックした。平成29年には、これらの作業を継続しつつ、データベースのプロトタイプ作成を開始する。また、収集されたデータは空間疫学グループによって空間疫学的に分析され、みまもりロジックグループによってプロセス分析がおこなわれる。その過程では、私領域からのアプローチを行う研究である中間集団の分析（ソーシャルキャピタルグループ、地域潜在力グループ）から得られたデータを共有し、データベースの強化を行う。

平成30年度には、3つのグループが協働し、包括的な支援の階層的トリアージ基準の作成と支援の質の評価尺度の作成を行う。これを行政の現場で使用することによって、有効性を確認し修正を施す。また支援の質の評価尺度の作成においては、ケア提供者のもつ死生観や人生観の研究から得られた知見（ケア人材育成グループ）が活用される。平成31年度には、これらの研究を踏まえて総合し、他地域への応用と社会全体の共有化できるみまもりデータベースや評価基準を開発し提供する。

【表2】私領域からのアプローチにおける研究開発の相関と公私連携



私領域からのアプローチでは、ソーシャルキャピタルグループの赤川、西村、祐成、地域潜在力グループの高瀬、小川、ケア人材育成グループの島菌、堀江、栗津が定期的な会合を持ち、また、それぞれのグループにおいて行われる社会調査にも参画することによ

て緊密な連携を行う。平成28年度はソーシャルキャピタルグループは組織化された集団（社協の把握しているNPO等の諸団体）の調査を開始した。地域潜在力グループは、潜在的な中間集団（ケアを第一次目的にしていない寺院や神社、寄り合い等）についての調査を実施した。とりわけ他地域での取り組みについて広くフィールド調査と勉強会を定期的に行った。ケア人材育成グループにおいては、他グループの調査や勉強会に参画するとともに、ケア提供者の死生観・人生観に関する質的・量的調査へ向けたフィールド調査を開始し、定期的な会合によって各調査から得られた知見を共有・検討し、適切な調査方法や質問紙票の項目について検討した。

平成29年度は、各グループの調査を継続するとともに、そこで得られた質的データ（ソーシャルキャピタルの測定、担い手意識の発掘、死生観の解明）を公領域グループへ提供し、データベース作成へ反映させる。一方、公領域グループが明らかにした地域診断に基づき、新しい地域モデルを生成する。ケア人材育成グループにおいては、質的データをケア提供者の育成の現場で生かすカリキュラムを実施する。平成30年度には、ソーシャルキャピタルグループはさらに踏み込んだ混合調査を継続し、地域潜在力グループにケア人材育成グループが参画することによって「集いの場」の社会実験を行う。また、これらの参画的調査（アクションリサーチ）によって、中間集団と生成モデルの検証を行い、公領域グループの作成するトリアージ基準と質的評価尺度へと反映する。また、最終年度のモデル構築と社会実装を準備し、平成31年度には、公領域グループと協働し、他地域へ応用できるツールの開発を行う。

3 - 2. 実施方法・実施内容

（1）プロジェクト全体

平成28年度は、約半年の期間のうちに、以下のような活動を行った（詳細については、「3 - 4. 会議等の活動」に記している）。

公領域では、この期間に13回のミーティングや勉強会を、川崎市の職員も参加する形で行った。私領域では16回のミーティングと勉強会を行い、その他に各グループでは川崎市でのインタビュー調査、フィールド調査等の訪問調査を行った。

また、公私両領域にまたがる会合としては6回行い、2017年2月25日には、日本精神保健福祉政策学会第26回学術集会のラウンドテーブル・セッションを川崎市産業振興会館にて行い、研究開発の代表および公私両領域からの代表による報告を行った。これらの会合の内2回はサイトビジットに位置づけられた。

（2）公領域

【メンタルヘルスG】

- ・精神保健福祉センターと会合を重ねることで、地域のニーズに根差した調査を行う体制作りを行った。
- ・倫理的観点や実現可能性を踏まえて、解析対象となり得る行政データに関して検討を重ねた。
- ・企画調査で明らかとなった地域の課題のひとつである困難事例に関する縦断的調査の準備を行った。

【空間疫学G】

- ・可視化のための実施計画の策定と体制整備を行った。実施内容やそのプロセス、どうい
う点にポイントを置いて研究開発を進めるかを検討した。
- ・川崎市健康福祉局障害保健福祉部精神保健福祉センターと連携して、川崎市の関係部署
と打合せを行い、どの項目について可視化を行い、それをどの様に利用するかなどの可視
化の実施計画を行政のニーズに合わせて策定必要があり、また、可視化に利用できるデー
タについて、どの様なデータがどこにどの様な形式で存在するかを明らかにするととも
に、それを利用するための体制整備を行った。
- ・川崎市の各担当部署と協議して可視化をする項目の選定を行った。
- ・可視化に必要なデータを利用するための体制を整備した。

【みまもりロジックG】

- ・みまもり項目特定（浅層・中間層・深層）のためのヒアリングと要素抽出を開始した。
- ・みまもり支援センター職員が有する経験知の可視化・構造化・標準化をすすめる
- ・外国人・ホームレス（自立支援寮居住者・ホームレス化した者）の状態プロセスモデル
の設計

（3）私領域

【ソーシャルキャピタルG】

- ・地域包括ケアを支える資源としての中間集団の見える化と連携を目標に、公私の「間」
に存在する中間集団として、宗教施設やNPO、ボランティアだけでなく、自治会・町内
会・民生委員・児童委員・社会福祉協議会、地域教育会議など既存の中間集団を対象に、
インタビュー調査を開始した（約50件）。それぞれの集団を、地域包括ケアを支える潜
在的資源として位置づけ、各団体の活動の中から、地域包括ケアにおける課題や困難事例の
発見・解決に資する中間集団におけるグッドプラクティスを収集し、データ共有の準備を
行った。
- ・翌年に行う量的調査の前提となる基礎的事実の集約を開始した。

【地域潜在力G】

- ・「集いの場」となりうる要件の抽出のため、すでに他地域で展開されているグッドプラ
クティスへの訪問調査を行った。これとあわせて、川崎市内の宗教組織（檀信徒会、氏子
組織、講など）のリスト化、および「集い型」活動の実施の有無を把握し、フィールド・
ワーク対象の選定を開始した。
- ・他地域グッドプラクティスから「集いの場」要件の抽出を行った。
- ・宗教組織（神社、寺院、教会）の「集い型」活動の実施の有無のリスト化を行った。

【ケア人材育成G】

- ・調査対象候補の確定と分担：各自、関心のある調査対象を候補の中から選ぶと同時に、
追加した。欠席者については仮に関心がありそうな調査対象を割り当てた。
 - ・地域包括ケアに関する基礎知識・事例研究、既存のケアに関わる公的な研修（ゲートキ
ーパープログラムなど）・ガイドラインなどを調査し、報告された。
- 川崎市でのフィールド調査を通して調査対象職種の範囲は、調査の第一段階において過不

足がないか検討した。また、このフィールド調査の段階で、本調査に理解があり、協力的な人物、場所とのラポールを深めた。上記の調査対象に関する既存の調査を網羅的に精査した。どのようなケアが行われているか、多様なケアの形態と、スピリチュアルケアやグリーンケアとを比較し、全人的ケアを実践する上で何が参考になるか、何が不足しているのかを検討した。

3 - 3. 研究開発結果・成果

(1) 全体・マネジメント体制

公領域の3グループの領域会議・打ち合わせが毎月行われ、私領域の3グループの領域会議・打ち合わせが隔月行われており、これにはマネジメントグループのメンバーが参加し、情報共有と研究開発の円滑な遂行のための調整を行った。

各グループでインターネットを使った情報共有ツール（メーリングリスト、チャットワーク）により、研究開発の遂行上の連絡を緊密に行った。

2016年10月21日に川崎市役所を訪問し、地域包括ケア担当室長および、関係する行政各機関担当者と面会し、研究開発の開始のあいさつと意見交換を行った。

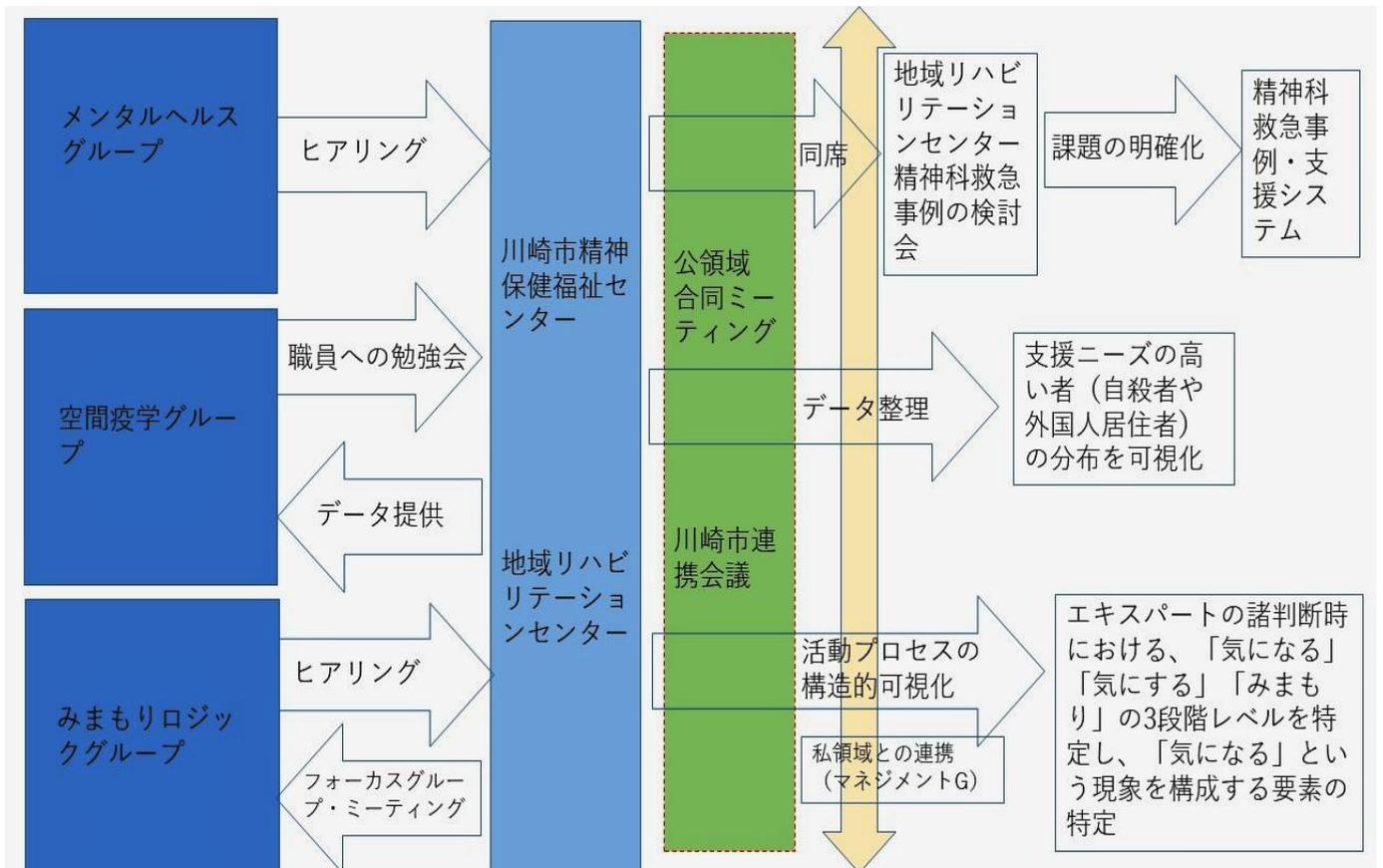
2016年11月3日に上智大学において全体会議と打ち合わせが行われた。これはRISTEXのサイトビジットへ位置づけられた。

2017年2月25日に川崎市で開催されたる日本精神保健福祉政策学会第26回学術集会のラウンドテーブル・セッションに参加し、これまでの成果を報告するとともに、参加者からの意見を得た。これはRISTEXのサイトビジットへ位置づけられた。

2017年3月15日に川崎市を訪問し、政各機関担当者と連絡会議を持ち、調査の進展状況の報告と意見交換。来年度以降の連絡会議の日程を検討した。

(2) 公領域

【図3 公領域の進捗と結果】



【メンタルヘルスグループ】

平成28年度は、川崎市精神保健福祉センター及び、地域リハビリテーションセンターにおけるヒアリングを実施した。毎月開催される、川崎市精神保健福祉センターと地域リハビリテーションセンターの職員が合同で行っている、精神科救急事例の検討会に同席しながら、精神科救急情報システムという、地域の中で非常に切迫した状況にある人の代表とも言える人達を、その後地域でどのように支援していくべきかという点を行政職員と共に検討した。みまもりロジックチームが毎月行っているヒアリングにも同行する中で、共同して全体像を検討した。地域の中で浅層からリスクをあぶり出していくシステムと、最も困難な状態にある世帯の代表格とも言える精神科救急事例（深層）をみまもり支援していくシステムとを、両方から可視化していくことによって、安全な暮らしを守る地域支援の仕組みを可視化していくという本研究班の向かうべき方向性と取り組むべき課題が明らかになった。

【空間疫学グループ】

平成28年度は、川崎市の職員を対象とした勉強会を開催し、統計、空間疫学の行政での活用方法を伝達した。行政から提供されたデータを地図上に重ね合わせることにより、その有用性について理解を促した。川崎市と協議を重ねて行政データを本研究で活用するた

めの枠組みを整理した。具体的に、支援ニーズの高い者として、自殺者や外国人居住者の分布を空間疫学的な手法により可視化した。

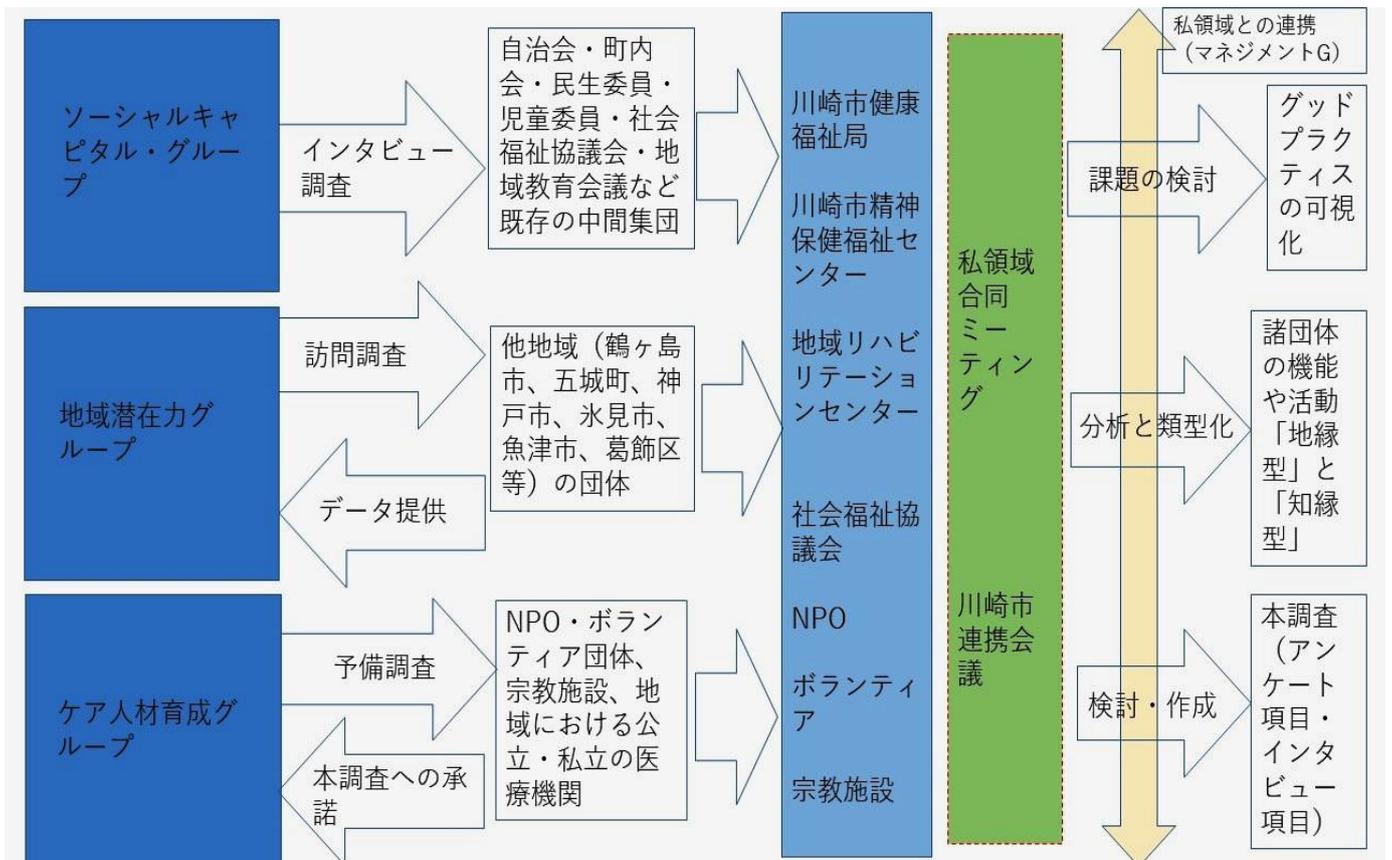
【みまもりロジックグループ】

平成28年度は、川崎市地域リハビリテーションセンターおよび保健福祉センターにおける諸調査を通じた、当該センター活動プロセスの構造的可視化を行った。

毎月フォーカスグループミーティングを実施し、浅層・中層・深層モデルの理解を経て、地域の障害福祉を業務とするエキスパートたちが、諸判断時に活用している事実・データについてヒアリングを繰り返した。その結果、中層における「気になる」「気にする」「みまもり」の3段階レベルを特定し、「気になる」という現象を構成する要素の特定を実施してきた。これらのフォーカスグループミーティングを通して、「気になる」現象の構造化知識の構造とコンテンツの初版ができつつある。これと並行して毎月実施している公グループミーティングでは、相互の関係性の整理と、めざすべき方向性の特定と、その解明のための対象の絞り込みを議論してきた。両者のミーティングの相互作用で、みまもり知識の構造化作業をすすめている。

(3) 私領域

【図4 私領域の進捗と結果】



【ソーシャルキャピタルグループ】

平成28年度は、公私の「間」に存在する中間集団として、宗教施設やNPO、ボランティアだけでなく、自治会・町内会・民生委員・児童委員・社会福祉協議会・地域教育会議など既存の中間集団を対象に、インタビュー調査を行なった（約30件）。それぞれの集団を、地域包括ケアを支える潜在的資源として位置づけ、各団体の活動の中から、地域包括ケアにおける課題や困難事例の発見・解決に資するグッドプラクティスを「見える化」し、公私連携につなげる方法を検討した。また複数の中間集団が互いの活動を認知・理解し、効率的に連携する機会の開発にも努めることを確認した。

【地域潜在カグループ】

平成28年度は、定期的開催される勉強会の他に、他地域のグッドプラクティスの収集に着手し、以下の団体訪問調査を行った。

鶴ヶ島市地域支え合い協議会（12月8日）、秋田県五城目町ワークショップ（2月2～3日）、神戸カトリックたかとり教会（2月19日）、氷見市地域福祉団体（3月2、3日）、専正寺デイサービスまごころ（魚津市）（3月4日）、葛飾区郷土と天文の博物館（町内会の歴史について聞き取り）（3月24日）

これらの調査によって（1）自治会を基礎とした地域ごとの地域住民が主体となって見守り機能を果たそうとするものと、（2）特定の目的にあわせ対象を絞ったサービスを展開する団体とに区別される。（1）は地縁型組織、（2）は知縁型組織と言い換えられることが明らかとなった。

【ケア人材育成グループ】

平成28年度は、グループでのミーティングを2016年9月20日、11月19日、2017年1月8日、2月19日と4回行い、調査対象となる候補機関・団体の選定を行った。また、研究実施者が個別に各団体を訪問し、フィールド・ワークを行い、信頼関係を築くとともに、本調査への協力の可能性を検討した。フィールド・ワークによって調査対象範囲の選定、既存調査・先行研究の批判的精査を行った。さらに、アンケート項目の精査と確定への検討を行った。アンケートの全体的な構成や形式は確定したが、具体的な文言については自然なものとなるよう、実際のケア提供者に意見を伺い、修正する必要があることが確認された。

これまでに次の機関・団体へ訪問した。

障害保健福祉部井田障害者センター、あやめ会（精神障害者の家族の会）、青丘社＝川崎市ふれあい館、国際交流センター、あさお診療、川崎マック（川崎アディクションフォーラムにて挨拶）、貝塚教会。

2016年12月、2017年1月に上智大学研究倫理委員会の担当者のコンサルティングを2回受け、倫理審査申請書の作成を行った。2017年2月28日提出、3月28日倫理審査が行われ承認を得た。

3 - 4. 会議等の活動

①公領域

年月日	名称	場所	概要
2016/10/4	みまもり指標検討ミーティング	川崎市 地域みまもりセン	浅層・中層のみまもり指標開発につながる要素について検討

		ター会議室	
2016/10/31	公領域研究グループ合同ミーティング	東京大学工学部3号館	公領域の3つの研究グループ間でお互いの研究内容を共有
2016/12/7	みまもり指標検討ミーティング	川崎市 地域みまもりセンターター会議室	浅層・中層のみまもり指標開発につながる要素抽出
2016/12/14	公領域研究グループ合同ミーティング	東京大学工学部3号館	公領域の3つの研究グループ間で共同で行う部分の内容を検討
2017/1/24	公領域研究実施に向けた準備会	川崎市健康福祉局	行政と公領域の研究グループ間で、公領域で実施する研究を実行できるための枠組みを検討
2017/1/26	みまもり指標検討ミーティング	川崎市 地域みまもりセンターター会議室	浅層・中層のみまもり指標開発につながる要素抽出
2017/2/13	公領域研究グループ合同ミーティング	東京大学工学部3号館	公領域の3つの研究グループ間で共同で行う部分の内容を検討
2017/3/7	精神保健福祉センター・障害者センター連携会議	川崎市精神保健福祉センター	精神科救急事例に関する情報共有と調査ニーズの聞き取り
2017/3/9	児童健診データを用いた小学校における中層みまもりロジック開発	東京大学工学部3号館	みまもりロジックグループ内での小学校児童の成長発達支援に対する適用可能性の検討
2017/3/10	児童健診データを用いた小学校における中層みまもりロジック開発	東京大学工学部3号館	みまもりロジックグループ内での小学校児童の成長発達支援に対する適用可能性の検討
2017/3/12	児童健診データを用いた小学校における中層みまもりロジック開発	東京大学工学部3号館	みまもりロジックグループ内での小学校児童の成長発達支援に対する適用可能性の検討
2017/3/13	公領域研究グループ合同ミーティング	東京大学工学部3号館	公領域の3つの研究グループ間で共同で行う部分の研究計画を検討

2017/3/15	川崎市・私領域・公領域合同ミーティング	川崎市健康福祉局	行政と研究グループの間で研究内容についての情報共有と意見交換
-----------	---------------------	----------	--------------------------------

②私領域

年月日	名称	場所	概要
2016/9/20	ケア人材育成 G ミーティング	上智大学	調査対象となる候補機関・団体の選定
2016/10/07	地域潜在力 G ミーティング	大正大学	企画調査の報告と研究概要の説明
2016/10/13	ソーシャルキャピタルグループ (SCG)・ミーティング	東京大学	今後の研究計画について打合せ
2016/11/10	地域潜在力 G ミーティング	大正大学	研究計画と実施体制の打合せ
2016/11/17	SCG ミーティング	東京大学	インタビュー調査の検討
2016/11/19	ケア人材育成グループ	上智大学	調査対象となる候補機関・団体の選定・フィールド調査の報告
2016/11/28	ケア人材育成 G	上智大学	倫理審査コンサルティング(粟津・伊藤)
2016/12/15	SCG ミーティング	東京大学	インタビュー調査実施状況の確認
2017/1/8	ケア人材育成 G	上智大学	調査対象となる候補機関・団体の選定・フィールド調査の報告・質問紙票の項目検討
2017/1/19	SCG ミーティング	東京大学	インタビュー調査実施状況の確認
2017/1/20	地域潜在力 G ミーティング	大正大学	予備調査報告と今後の研究計画
2017/1/26	ケア人材育成 G	上智大学	倫理審査コンサルティング(粟津・伊藤)
2017/2/15	地域潜在力 G ミーティング	大正大学	講師を招聘した勉強会、および他グループとの情報共有
2017/2/16	SCG ミーティング	東京大学	インタビュー調査実施状況の確認
2017/2/19	ケア人材育成 G	上智大学	調査対象となる候補機関・団体の選定・フィールド調査の報告・質

			間紙票の項目検討
2017/3/22	SCG ミーティング	東京大学	インタビュー調査の中間報告

③公私両領域によるもの

年月日	名称	場所	概要
2016/10/21	川崎市担当者との連絡会議	川崎市役所 (ソリッドスクエア)	地域包括ケア担当室長・関係する行政各機関担当者と面会し、研究開発の開始の挨拶と意見交換。
2016/11/3	プロジェクト発足式・全体集会	上智大学	正式なプロジェクト発足式、前年度企画調査の報告、打ち合わせ。 RISTEXサイトビジット。
2017/2/25	日本精神保健福祉政策学会第26回学術集会のラウンドテーブル・セッション	川崎市産業振興会館	研究開発の代表および公私両領域からの代表による報告を行った。 RISTEXサイトビジット。
2017/3/15	川崎市担当者との連絡会議	川崎市役所 (ソリッドスクエア)	関係する行政各機関担当者と面会し、調査の進展状況の報告と意見交換。来年度以降の連絡会議の日程検討。

4. 研究開発成果の活用・展開に向けた状況

川崎市から提供されたデータを解析し、またプロセス分析を行うことによってその結果を川崎市のシステム作りに向けて還元するとともに、職員をターゲットにラーニングの機会を提供することによって還元することを目指した。公領域の3グループの領域会議・打ち合わせが毎月行われ、私領域の3グループの領域会議・打ち合わせが隔月行われた。これにはマネジメントグループのメンバーが参加し、情報共有と研究開発の円滑な遂行のための調整を行った。公領域と私領域においては次の状況である。

公領域では、メンタルヘルスグループは、倫理的観点や実現可能性を踏まえて、解析対象となり得る行政データに関して検討を重ねた。企画調査で明らかとなった地域の課題のひとつである困難事例に関する縦断的調査の準備を行った。空間疫学グループでは、川崎市健康福祉局障害保健福祉部精神保健福祉センターと連携して、川崎市の関係部署と打合せを行い、どの項目について可視化を行い、それをどの様に利用するかなどの可視化の実施計画を行政のニーズに合わせて策定必要があり、また、可視化に利用できるデータについて、どの様なデータがどこにどの様な形式で存在するかを明らかにするとともに、それを利用するための体制整備を行った。みまもりロジックグループでは、3層構造のみまもりロジックの考え方を、川崎市から提供された小学校児童の成長発達支援に対して適用した。浅層では、小学校で毎年3回実施する身体の身長と体重を用いて、低身長・肥満・痩せのリスクを抽出し、3要素を総合判断するリスク類型をつくり、中層の原因分析に移行する5～10%の児童を絞り込む。その後、中層でクラス担任による原因分析を実施するプロセスを設計した。中層から深層に降りて原因分析する児童の絞り込みと、深層で対応す

るプレイヤーの選定プロセスまで検討した。

私領域では、地域住民によるグッドプラクティスの収集と分析、他地域での取り組みの調査を継続している。ソーシャルキャピタルグループが、既存の中間集団を対象に、インタビュー調査を開始し、それぞれの集団を、地域包括ケアを支える潜在的資源として位置づけ、各団体の活動の中から、地域包括ケアにおける課題や困難事例の発見・解決に資する中間集団におけるグッドプラクティスを収集し、データ共有の準備を行った。地域潜在カグループでは、「集いの場」となりうる要件の抽出のため、すでに他地域で展開されているグッドプラクティスへの訪問調査を行った。これとあわせて、川崎市内の宗教組織（檀信徒会、氏子組織、講など）のリスト化、および「集い型」活動の実施の有無を把握し、フィールド・ワークの対象の選定を開始した。ケア人材育成グループでは、とりわけ、川崎在住のキーパーソンとなる個人を育成するために、川崎市においてケア従事者に参加可能なものとして、上智大学グリーンケア研究所で行っているグリーンケア人材養成講座の応用の可能性について検討を始めた。

また、翌平成29年度にむけて、マネジメントと川崎市との連携の強化のために、専門知識を持つ研究開発者を川崎市にも週数日常駐させることが検討され、人員の確保が行われた。さらに、隔月程度、プロジェクトの全体集会、川崎市との連絡会議、職員も含めた報告会の三つを兼ねた会議を隔月程度以てはどうかという提案がなされ、それに向けての準備も行われた。

5. 研究開発実施体制

(1) メンタルヘルスグループ

①リーダー：笠井 清登（東京大学医学系研究科精神医学 教授）

行政機関との折衝：熊倉 陽介 東京大学大学院医学系研究科精神保健学分野

②実施項目

行政機関が行う支援の現状把握、質の評価と改善のための基盤構築

- ・ 精神科救急情報システムのプロセス分析・評価・改善・改善手法の一般化
- ・ 精神科救急情報システムのデータベース構築と空間疫学を用いた評価
- ・ 地域支援者の視点から「気になる」世帯の質的分析

(2) 空間疫学グループ

①リーダー：立森久照（国立研究開発法人国立精神・神経医療研究センター、統計解析研究室長）

②実施項目

空間疫学による川崎市行政データの可視化と解析

(3) みまもりロジックグループ

①リーダー：水流聡子（東京大学大学院工学系研究科、特任教授）

②実施項目

3層からなるみまもり構造を設計し、浅層・中層におけるみまもりのための指標を検討

(4) ソーシャルキャピタルG

①リーダー：赤川学（東京大学大学院、准教授）

②実施項目

地域包括ケアを支える資源としての中間集団の見える化と連携

公私の「間」に存在する中間集団として、宗教施設やNPO、ボランティアだけでなく、自治会・町内会・民生委員・児童委員・社会福祉協議会・地域教育会議など既存の中間集団を対象に、インタビュー調査を行う（約50件）。それぞれの集団を、地域包括ケアを支える潜在的資源として位置づけ、各団体の活動の中から、地域包括ケアにおける課題や困難事例の発見・解決に資するグッドプラクティスを「見える化」し、公私連携につなげる方法を検討する。また複数の中間集団が互いの活動を認知・理解し、効率的に連携する機会の開発にも努める。

（5）地域潜在力グループ

①リーダー：金子順一（大正大学、教授）

②実施項目

・他地域におけるグッドプラクティス収集

埼玉県鶴ヶ島市、秋田県五城目町・藤里町、兵庫県神戸市、富山県氷見市・魚津市の地縁組織、NPO団体、寺院を訪問し、参与観察および聞き取り調査

・地域福祉の人材発掘

全国シルバー人材センター事業協会の専務理事を招き勉強会を開催。シルバー人材の活動と地域福祉の担い手としての可能性を検討。

（6）ケア人材育成G

①リーダー：島藺 進（上智大学グリーンケア研究所、所長）

・現地調査による調査対象範囲の選定

・調査対象候補の確定と分担：各自、関心のある調査対象を候補の中から選ぶと同時に、追加する。

・調査対象別に、基礎的情報を収集する。ネット情報、新聞記事情報、行政・教育機関の報告書、調査対象に関する先行研究（論文・書籍）。

・この現地調査の段階で、本調査に理解があり、協力的な人物、場所とのラポールを深める。逆に調査に非協力的、拒絶的な人物、場所にどのような傾向性があるかも把握する。

6. 研究開発実施者

メンタルヘルスG

	氏名	フリガナ	所属機関等	所属部署等	役職 (身分)
○	笠井 清登	カサイ キ ヨト	東京大学大学院	医学系研究科精神 医学	教授
	岡村 毅	オカムラ ツヨシ	東京大学大学院	医学部精神科	助教
	熊倉 陽介	クマクラ ヨウスケ	東京大学大学院	医学系研究科精神 保健学分野	D2
	金原 明子	カネハラ アキコ	東京大学大学院	医学系研究科精神 医学	D2
	松本 励子	マツモト レイコ	東京大学大学院	医学系研究科精神 医学	技術補佐員
	小池 春菜	コイケ ハ ルナ	東京大学	医学系研究科精神 医学	学術支援専門 職員

空間疫学G

	氏名	フリガナ	所属機関等	所属部署等	役職 (身分)
○	立森 久照	タチモリ ヒサテル	国立研究開発法人 国立精神・神経医 療研究センター	精神保健研究所	室長
	高橋 邦彦	タカハシ クニヒコ	名古屋大学大学院	医学系研究科	准教授
	山内 貴史	ヤマウチ タカシ	独立行政法人労働 者健康安全機構 労働安全衛生総合 研究所	過労死等調査研究 センター	研究員
	宮田 裕章	ミヤタ ヒ ロアキ	慶應義塾大学大学 院	医学系研究科	教授
	加藤 直広	カトウ ナ オヒロ	国立研究開発法人 国立精神・神経医 療研究センター	精神保健研究所	科研費研究 員

	菅 知絵美	カン チエ ミ	国立研究開発法人 国立精神・神経医 療研究センター	精神保健研究所	流動研究員
	岡村 毅	オカムラ ツヨシ	東京大学大学院	医学部精神科	助教
	熊倉 陽介	クマクラ ヨウスケ	東京大学大学院	医学系研究科精神 保健学分野	D2
	赤川 学	アカガワ マナブ	東京大学大学院	人文社会系研究科	准教授

みまもりロジックG

	氏名	フリガナ	所属機関等	所属部署等	役職 (身分)
○	水流 聡子	ツル サト コ	東京大学大学院	工学系研究科化学 システム工学専攻 品質・医療社会シ ステム工学寄付講 座	特任教授
	矢作 尚久	ヤハギ ナ オヒサ	東京大学大学院	工学系研究科	主幹研究員
	佐野 けさ 美	サノ ケサ ミ	東京大学大学院	工学系研究科	学術支援専 門職員
	谷崎 浩一	タニザキ コウイチ	東京大学大学院	工学系研究科	学術支援専 門職員
	岡本 恵美	オカモト エミ	東京大学大学院	工学系研究科	学術支援専 門職員
	佐藤千恵美	サトウ チ エミ	東京大学大学院	工学系研究科	学術支援専 門職員
	仮屋崎 真 紀	カリヤザキ マキ	東京大学大学院	工学系研究科	M2

ソーシャルキャピタルG

	氏名	フリガナ	所属機関等	所属部署等	役職 (身分)
○	赤川 学	アカガワ マナブ	東京大学大学院	人文社会系研究科	准教授
	西村 明	ニシムラ アキラ	東京大学大学院	人文社会系研究科	准教授

	出口 剛司	デグチ タ ケン	東京大学大学院	人文社会系研究科	准教授
	祐成 保志	スケナリ ヤスシ	東京大学大学院	人文社会系研究科	准教授
	寺田 光之	テラダ ミ ツユキ	東京大学大学院	人文社会系研究科	D1
	三浦 倫平	ミウラ リ ンペイ	東京大学大学院	人文社会系研究科	助教
	石島 健太 郎	イシジマ ケンタロウ	首都大学東京	人文科学研究科	学術振興会 特任研究員 (PD)
	榎原 克哉	クシハラ カツヤ	日本教育財団	東京通信大学（仮 称）設置準備室	助手（研究補 助）
	藤田 研二 郎	フジタ ケ ンジロウ	東京大学大学院	人文社会系研究科	D4
	藤田 研二 郎	フジタ ケ ンジロウ	無		
	藤田 研二 郎	フジタ ケ ンジロウ	東京大学大学院	人文社会系研究科	特別研究員 (予定)
	井口 尚樹	イグチ ナ オキ	東京大学大学院	人文社会系研究科	D1

地域潜在力G

	氏名	フリガナ	所属機関等	所属部署等	役職 (身分)
○	金子 順一	カネコ ジ ユンイチ	大正大学	地域構想研究所	特命教授
	神山 裕美	カミヤマ ヒロミ	大正大学	人間学部	教授
	高瀬 顕功	タカセ ア キノリ	大正大学	地域構想研究所	助教
	小川 有閑	オガワ ユ ウカン	大正大学	地域構想研究所	主幹研究員
	齋藤 知明	サイトウ トモアキ	大正大学	心理社会学部	専任講師
	星野 壮	ホシノ ソ ウ	大正大学		非常勤講師
	小林 惇道	コバヤシ アツミチ	大正大学大学院	文学研究科	D3
	福井 敬	フクイ タ カシ	大正大学大学院	文学研究科	D1

	水島 淳	ミズシマ ジュン	大正大学大学院	文学研究科	M2
	宮澤 寛幸	ミヤザワ ヒロユキ	大正大学大学院	文学研究科	M2
	小林 俊暁	コバヤシ トシアキ	大正大学大学院	人間学研究科	M1
	下垣 良太	シモガキ リョウタ	大正大学大学院	文学研究科	M1

ケア人材育成G

	氏名	フリガナ	所属機関等	所属部署等	役職 (身分)
○	島 蘭 進	シマヅノ ススム	上智大学	グリーンケア研究 所	所長
	堀江 宗正	ホリエノ リチカ	東京大学大学院	人文社会系研究科	准教授
	伊藤 高章	イトウ タ カアキ	上智大学	グリーンケア研究 所	副所長
	栗津 賢太	アワズ ケ ンタ	上智大学	グリーンケア研究 所	特別研究員
	土居 由美	ドイ ユミ	聖マリアンナ医科 大学		非常勤講師
	寺戸 淳子	テラド ジ ュンコ	専修大学	文学部	非常勤講師
	山本 榮美 子	ヤマモト エミコ	東京大学大学院	人文社会系研究科	特任研究員
	松岡 秀明	マツオカ ヒデアキ	東京医科歯科大学 大学院	保健衛生学研究科	非常勤講師
	鈴木 梨里	スズキ リ サ	東洋大学大学院	社会学研究科	D1
	笥 智子	カケヒ ト モコ	上智大学大学院	実践宗教学研究科	M1
	井口 真紀 子	イグチ マ キコ	上智大学大学院	実践宗教学研究科	M1
	黒田 純一 郎	クロダ ジ ュンイチロ ウ	東京大学大学院	人文社会系研究科	D3
	中村 芳雅	ナカムラ ヨシマサ	東京大学大学院	人文社会系研究科	D1
	横山 優樹	ヨコヤマ ユウキ	東京大学大学院	人文社会系研究科	D1

7. 研究開発成果の発表・発信状況、アウトリーチ活動など

7-1. ワークショップ等

年月日	名称	場所	参加人数	概要
2016/ 11/17	第3回・質的調査連絡会	東京大学	25人	西村明「福博のマチバを歩く —新修福岡市史調査の10年」
2016/12 /20	第1回地域包括ケア・精神保健勉強会	川崎市健康福祉局	約30名	立森久照「空間疫学とは何か -どのように活用できるのか」
2017/1/ 24	第2回地域包括ケア・精神保健勉強会	川崎市産業振興会館	約30名	立森久照「手元の資料を課題分析に活用する-川崎市消防局救急搬送データをもとに」
2017/2/ 21	第3回地域包括ケア・精神保健勉強会	川崎市産業振興会館	約30名	立森久照「データ可視化の実践に向けて～GIS入門編～」
2017/2/ 25	日本精神保健福祉政策学会第26回学術集会ラウンドテーブル・セッション	川崎市産業振興会館	150人	研究開発の代表および公私両領域からの代表による報告を行った。（島菌進、岡村毅、小川有閑） RISTEXサイトビジット。
2017/3/ 14	第4回地域包括ケア・精神保健勉強会	川崎市産業振興会館	約30名	水流聡子「PDCAサイクルと市民サービスの品質向上」について学ぶ
2017/3/ 22	第4回・質的調査連絡会	東京大学	20人	赤川学「川崎市地域包括ケアに関する混合調査の現状」

7-2. 社会に向けた情報発信状況、アウトリーチ活動など

(1) 書籍、DVD

・なし

(2) ウェブサイト構築

・なし

(3) 学会（7-4.参照）以外のシンポジウム等への招聘講演実施等

・なし

7-3. 論文発表

(1) 査読付き（ 0 件）

●国内誌（ 0 件）

●国際誌（ 0 件）

（2）査読なし（ 0 件）

7-4. 口頭発表（国際学会発表及び主要な国内学会発表）

（1）招待講演（国内会議 6 件、国際会議 0 件）

- ・熊倉陽介：こころと身体を健康を人々に届ける.第12回日本統合失調症学会、鳥取、2017年3月24日.(講演)
- ・岡村毅、熊倉陽介、笠井清登：複雑化する援助希求と行政職員が直面する課題－質問紙調査による困難事例の探索-、日本精神保健福祉政策学会第26回学術大会、川崎、2017年2月25日.(口演)
- ・立森久照，空間疫学的手法により可視化された情報は川崎市の地域包括ケアでどのように活用できるのか，日本精神保健福祉政策学会，川崎市，2017.2.25
- ・赤川学・出口剛司（東京大学大学院）、ソーシャルキャピタルは地域包括ケアに役立つかー理論的展望と川崎市の取組みからー、日本精神保健福祉政策学会第26回学術大会ラウンドテーブル、2017年2月25日、川崎市産業振興会館。
- ・小川有閑（大正大学地域構想研究所）、市民の援助希求に応える民間組織の現状と課題、川崎市川崎区を事例に-、日本精神保健福祉政策学会第26回学術大会ラウンドテーブル、2017年2月25日、川崎市産業振興会館。
 - ・座長 島菌 進（上智大学グリーンケア研究所）「都市における援助希求の多様性に対応する公私連携ケアモデルの研究開発」日本精神保健福祉政策学会第26回学術大会ラウンドテーブル、2017年2月25日、川崎市産業振興会館。

（2）口頭発表（国内会議 1 件、国際会議 0 件）

- ・仮屋崎真希・水流聡子・他：学校健診データを利活用した小児地域保健医療システムの構築、第1回日本臨床知識学会、東京大学、2017年1月

（3）ポスター発表（国内会議 1 件、国際会議 0 件）

- ・岡村毅、熊倉陽介、宮脇護、津田多佳子、鈴木剛、明田久美子、高瀬頭功、小川有閑、島菌進、笠井清登：困難事例の探索的研究：行政職員へのグループインタビューおよび質問紙調査から.第36回日本社会精神医学会、東京、2017年3月4日.(ポスター)

7-5. 新聞報道・投稿、受賞等

（1）新聞報道・投稿（ 0 件）

（2）受賞（ 0 件）

（3）その他（ 0 件）

7-6. 知財出願

（1）国内出願（ 0 件）